

論文 Article

鞆の浦における社寺建築の建築年代と細部意匠

佐藤大規¹

Years of construction and ornamental details of shrines and temples in Tomonoura, Fukuyama

Taiki SATO¹

要旨：鞆の浦（広島県福山市鞆町）は、古くから繁栄してきた港町として著名であり、現在でも歴史的な町並みや港湾施設を多数残している。ところで、鞆の浦は山と海に囲まれた狭隘な土地柄にも拘わらず、多くの社寺が存している。今回、鞆の浦の社寺建築の調査を行ったので、その結果をもとに鞆の浦の社寺建築の建築年代と細部意匠について述べることにしたい。

まず、鞆の浦には広島県内には建築遺構が少ないとされる17世紀に造立されたものが14棟も残っていることが判明した。それは、商人の経済力を背景としたものと考えられる。また細部意匠は、県内の他地域と比べて先進的かつ秀逸なものが多数あり、京都や大坂から直接に最新建築技術が入ってくるという地理的環境によるものと考えられる。また随所に見られた独特な台輪は、明王院本堂（福山市）を模倣したのと考えられ、地域における細部意匠の伝播を伺うことができた。

キーワード：鞆の浦、神社、寺院、建築年代、細部意匠

Abstract: Tomonoura is a famous port in Japan that has prospered since ancient times, and historical towns and port installations remain in the Tomonoura area. Although Tomonoura is a narrow place enclosed by the mountain and the sea, it contains a significant number of shrines and temples. I investigated these buildings and here report on their years of construction and ornamental details.

It turned out that 14 of the buildings had been built in the 17th century, which makes them quite old compared with the other shrines and temples in Hiroshima. One theory for their abundance is that they originally represented merchants' financial power. The ornamentation of these buildings was more advanced and impressive than that of other regions in Hiroshima prefecture, possibly due to cutting-edge technology from Kyoto and Osaka that filtered into Tomonoura via the port.

One special feature of these buildings is a peculiar plinth block that was originally used in the main hall of Myoo-in Temple. The presence of this plinth block illustrates the spread of ornamental details throughout the region.

Keywords: Ornamental details, Shrine, Temple, Tomonoura, Year of construction

I. 緒言

鞆の浦（広島県福山市鞆町）は、古くから繁栄してきた港町として著名であり、現在でも歴史的な町並みや港湾施設が多数残っている¹⁾。ところで、鞆の浦は山と海に囲まれた狭隘な土地柄にも拘わらず、江戸時代には、元禄13年(1700)頃の鞆の浦を描いたとされる「元禄絵図」²⁾によると神社4件、寺院28件もの社寺が存していた。現在でも神社2件、寺院19件の計

21件が残っている(図1)が、これまで鞆の浦の社寺建築について本格的な調査研究が成されたことはなかった。

今回、鞆の浦に存する社寺建築の調査(実測・建築年代・細部意匠など)³⁾を行う機会を得た。本稿では、その調査結果をもとにして、鞆の浦の社寺建築の建築年代・細部意匠に着目して、その特色を述べることにしたい。



図1 鞆の浦の社寺分布
都市計画図を基に著者作製

II. 調査社寺建築の概要

調査の対象としたのは、鞆の浦に存する社寺建築の内、昭和前期(昭和20年頃)までの造立と判定した83棟(表1)である。神社と寺院の内訳は、神社建築26棟、寺院建築57棟である。なお、すでに評価の定まっている重要文化財安国寺釈迦堂(室町中期)⁴⁾・重要文化財沼名前神社能舞台(江戸前期)⁵⁾・史跡内

福禪寺本堂(元禄7年[1694])⁶⁾および対潮楼(元禄年間)⁷⁾は含んでいない。

次に、調査を実施した江戸時代の建築遺構33棟の内、特に建築年代が古い17世紀に造立された11棟の概要を記しておく。

阿弥陀寺本堂

現在の本堂(図2)は、近年に本体の改造がされて

表1 調査社寺建築一覧

社寺名	建物名	年代	構造形式	
安国寺	山門	明治時代	一間一戸、薬医門、切妻造、棧瓦葺	
	子安観音堂	昭和7年(1932)	正面三間、側面三間、背面一間通り下屋付、宝形造、向拝一間、本瓦葺	
	金倉寺堂	昭和前期	正面一間、側面一間、宝形造、本瓦葺	
辻堂	道隆寺堂	明治時代	正面一間、側面二間、切妻造、棧瓦葺	
	地藏堂	慶安年間(1648-52)	正面三間、背面二間、側面二間、宝形造、本瓦葺	
正法寺	善通寺堂	19世紀中期	正面一間、側面一間、宝形造、本瓦葺	
	本堂	18世紀中期(昭和戦後改造)	入母屋造、棧瓦葺	
	山門	19世紀前期	一間一戸、薬医門、切妻造、本瓦葺	
	十六羅漢堂	19世紀前期	一間四方、寄棟造、本瓦葺	
慈徳院	郷照寺堂	明治時代	正面一間、側面二間、正面入母屋造、背面切妻造、棧瓦葺	
	本堂	昭和17年(1942)頃	桁行49尺、梁間36尺、入母屋造、棧瓦葺、右方玄関張り出し、入母屋造、妻入、棧瓦葺	
	山門	17世紀末期(昭和17年(1942)頃改修)	一間一戸、薬医門、切妻造、本瓦葺	
善行寺	薬師堂	昭和10年(1935)	桁行一間、梁間一間、寄棟造、背面仏壇張り出し、本瓦葺	
	本堂	18世紀中期	桁行39尺9寸、梁間48尺8寸、入母屋造、向拝一間、棧瓦葺	
	山門	明治時代	四脚門、切妻造、本瓦葺(滴水瓦)	
小鳥神社	経堂	18世紀前期	正面三間、側面四間、宝形造、鉄板葺、向拝一間、唐破風造、本瓦葺	
	本殿	明治32年(1899)	正面一間、背面二間、側面二間、入母屋造、向拝一間、銅板葺	
	幣殿	明治32年(1899)	正面一間、側面三間、両下造、銅板葺	
	拝殿	明治32年(1899)	正面三間、背面五間、側面二間、入母屋造、平入、向拝一間、唐破風造、銅板葺	
	天目一箇神社本殿	大正時代	正面一間、側面一間、入母屋造、平入、向拝一間、銅板葺	
本願寺	稲荷神社本殿	昭和前期	一間社流見世棚造、銅板葺	
	大黒神社本殿	昭和前期	一間社流見世棚造、銅板葺	
	手水舎	昭和前期	正面一間、背面二間、側面一間、切妻造、棧瓦葺	
	山門	昭和前期	一間一戸、棟門、切妻造、本瓦葺	
	沼名前神社	渡守神社本殿	貞享2年(1685)	三間社流造、庇通し一間、銅板葺
		八幡神社本殿	19世紀中期	三間社流造、銅板葺
		巖島神社本殿	大正時代	一間社流見世棚造、銅板葺
		竈神社本殿	昭和前期	一間社流見世棚造、銅板葺
		松尾神社本殿	昭和前期	一間社流見世棚造、銅板葺
		天満神社本殿	昭和前期	一間社流見世棚造、銅板葺
大観寺	随神門	享保20年(1735)	三間一戸、八脚門、入母屋造、銅板葺	
	神呪舎	昭和前期	正面一間、背面二間、側面二間、正面一間通り土庇、切妻造、平入、本瓦葺	
	社務所	明治44年(1911)	入母屋造、妻入、式台付属、唐破風造、銅板葺	
	能見所	明治時代	切妻造、平入、正面土庇付、棧瓦葺	
	本堂	昭和13年(1938)頃	桁行45尺8寸、梁間38尺7寸、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	
	山門	昭和13年(1938)頃	一間一戸、薬医門、切妻造、本瓦葺	
	鐘楼	昭和13年(1938)頃	正面一間、側面一間、入母屋造、本瓦葺	
	地藏堂	明治時代	正面一間、側面一間、宝形造、棧瓦葺	
	小松寺	本堂	明治40年(1907)	正面32尺9寸、側面26尺1寸、入母屋造、本瓦葺
		山門	18世紀後期	四脚門、切妻造、本瓦葺
顕政寺	金比羅神社本殿	明治時代	一間社流見世棚造、棧瓦葺	
	本堂	19世紀前期	桁行42尺8寸、梁間40尺6寸、入母屋造、向拝一間、棧瓦葺	
	山門	17世紀末期	四脚門、切妻造、本瓦葺	
妙蓮寺	本堂	宝暦12年(1762)	桁行46尺8寸、梁間43尺6寸、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	
	山門	大正時代	四脚門、切妻造、本瓦葺	
	鐘楼	元文4年(1739)	正面一間、側面一間、入母屋造、本瓦葺	
	番神堂本殿	大正4年(1915)	正面三間、側面二間、正面入母屋造、背面切妻造、背面一間通り下屋、妻入棧瓦葺	
静観寺	番神堂拝殿	大正4年(1915)	正面一間、側面二間、入母屋造、平入、向拝一間、棧瓦葺、背面渡廊付、両下造、棧瓦葺	
	鎮守社(向かって左殿)	明治時代	一間社流見世棚造、銅板葺	
	鎮守社(右殿)	昭和前期	一間社流見世棚造、銅板葺	
	本堂	大正時代	入母屋造、正面一間通り下屋付、左方玄関接続、棧瓦葺	
	山門	18世紀前期	一間一戸、薬医門、切妻造、本瓦葺	
法宣寺	熊谷寺堂	昭和7年(1932)	正面一間、側面二間、正面入母屋造、背面切妻造、棧瓦葺	
	小堂	昭和前期	正面一間、側面一間、切妻造、妻入、棧瓦葺	
	鎮守社	昭和前期	一間社流見世棚造、銅板葺	
	本堂	18世紀中期	桁行49尺1寸、梁間43尺4寸、入母屋造、向拝一間、棧瓦葺	
南禅坊	山門	19世紀前期	四脚門、切妻造、本瓦葺	
	本堂	万延元年(1860)	桁行46尺2寸、梁間57尺2寸、入母屋造、向拝一間、本瓦葺	
	山門	17世紀末期~18世紀初期	一間一戸、二重二階門、鐘楼門、入母屋造、本瓦葺	
阿弥陀寺	本堂	17世紀前期(近年に大改造)	入母屋造、向拝一間、唐破風造、本瓦葺	
	山門	18世紀中期	四脚門、切妻造、本瓦葺	
	鐘楼	慶安年間(1648-52)	桁行一間、梁間一間、入母屋造、本瓦葺	
	観音堂	延宝年間(1673-81)	正面三間、側面二間、背面一間通り下屋付、寄棟造、向拝一間、本瓦葺	
	貞城稲荷神社本殿	明治時代	一間社流見世棚造、銅板葺	
医王寺	地藏覆屋	大正時代	正面一間、側面一間、宝形造、本瓦葺	
	本堂	貞享2年(1685)	桁行三間、梁間三間、背面一間通り下屋付、寄棟造、向拝一間、本瓦葺	
	御影堂	明治時代	桁行42尺4寸、梁間32尺5寸、入母屋造、本瓦葺	
	仁王門	元禄5年(1692)	三間一戸、八脚門、切妻造、本瓦葺	
	鐘楼	19世紀前期	正面一間、側面一間、切妻造、本瓦葺	
	太子殿	18世紀前期	正面一間、側面一間、宝形造、本瓦葺	
明圓寺	地藏堂	昭和前期	正面一間、背面二間、側面一間、切妻造、本瓦葺	
	本堂	18世紀前期	桁行46尺3寸、梁間46尺4寸、入母屋造、向拝一間、背面下屋付属、本瓦葺	
	山門	大正時代	四脚門、切妻造、本瓦葺	
地蔵院	鐘楼	承応年間(1652-55)	正面三間、側面二間、腰葺付、入母屋造、本瓦葺	
	山門	18世紀中期	四脚門、切妻造、本瓦葺	
	長尾寺堂	明治時代	正面一間、側面一間、切妻造、妻入、棧瓦葺	
福禅寺	六地藏堂	大正時代	正面九尺三寸、側面三尺、切妻造、平入、棧瓦葺	
	庫裏	明治時代	切妻造、平入、棧瓦葺、左方玄関突出、入母屋造、妻入、本瓦葺	
	浄泉寺	本堂	天保14年(1843)	正面36尺2寸、側面26尺4寸、背面下屋、寄棟造、向拝一間、棧瓦葺
圓福寺	山門	昭和11年(1936)	一間一戸、薬医門、切妻造、本瓦葺	
	本堂	昭和7年(1932)	正面46尺3寸、側面32尺6寸、入母屋造、向拝一間、背面夾明楼接続、棧瓦葺	
	鎮守社	昭和前期	一間社流見世棚造、銅板葺	
沼名前神社御旅所	明治時代	正面19尺3寸、側面12尺2寸、入母屋造、正面一間通り下屋付、棧瓦葺		

おり、当初の面影はない。本堂の正面には、唐破風造の向拝がある。角柱を虹梁形の頭貫で繋ぎ、その上に台輪を渡す。組物は、柱上で出三斗を組み、唐破風の妻虹梁を受ける。虹梁上には蓐股を載せ唐破風の棟木を受ける。建築年代は『あくた川のまき』によると延宝年間（1673-81）という⁸⁾が、虹梁形の頭貫や木鼻の絵様は、彫りが浅く、刻線も細く古式であり、17世紀前期まで遡る可能性があるため、本稿ではとりあえず17世紀前期としておく⁹⁾。

地藏堂（辻堂）

地藏堂（図3）は安国寺の前に立つ辻堂で、『あくた川のまき』によると慶安年間（1648-52）に輛奉行であった酒井七郎右衛門によって造立されたという¹⁰⁾。各部の風食から17世紀中期のものと考えられるので、その時のものとしてよいであろう。この堂は正方形平面を正面三間、側面二間に割り、正面の中央柱間には、蓐座に吊り込んだ外開きの棧唐戸を設ける。正面の両脇と側面の前方間は、格子窓とする。また棧唐戸の上方には、弓欄間を嵌める。柱はすべて角柱で、長押を廻らせる。組物は舟肘木を用いる。簡素な堂であるが、辻堂としては広島県内で最古のものと考えられる。

阿弥陀寺鐘楼

この鐘楼（図4）は、『あくた川のまき』によると慶安年間（1648-52）の建立という¹¹⁾。各部の風食から17世紀中期頃のものと考えられること、梵鐘に「慶安壬辰」（1652）の銘があることから、その頃のものとよいであろう。この鐘楼は、桁行一間に梁間一間の正方形平面で、柱はすべて角柱とし、それらを貫で繋ぎ、なおかつ内転させることで安定させている。柱上には大斗絵様肘木を載せ、桁を受ける。屋根は二軒であるが、近年に取り替えられている。

明圓寺鐘楼

この鐘楼（図5）は、『あくた川のまき』によると承応年間（1652-55）の造立と伝えられる¹²⁾。上階の実肘木の形や絵様、下階の蓐股の形から17世紀のものと考えられ、承応頃のものとしてよいであろう。この鐘楼は袴腰付きで、下階は正面三間に側面二間とし、柱上に台輪を渡し、その上に出三斗型二手先を置き廻縁を支える腰組とする。中備は、正背面の中央間に唐獅子の浮彫りをあしらった蓐股、その両脇および側面には蓐束を置く。一般的な袴腰付きの鐘楼は下階の柱は角柱とするが、この鐘楼では円柱としており格式が高い。上階も正面三間に側面二間で、現状では吹き放ちかつ吹き抜けとする。柱は円柱で、組物は出三斗を柱上に載せ、その上に置いた実肘木で桁を受ける。浄

土真宗寺院では袴腰付き鐘楼を建てるのが制限されていたことから、現存例は全国的にも非常に乏しい。広島県内では不動院鐘楼（永享5年〔1433〕造立、天正18年〔1590〕修理）に次いで古いものと考えられる。

阿弥陀寺観音堂

観音堂（図6）は、『あくた川のまき』によると延宝年間（1673-81）に輛の浦の商人大坂屋によって建てられたという¹³⁾。身舎と向拝の木鼻や向拝の虹梁形頭貫の絵様は、17世紀後期頃を示していると考えられるので、延宝頃のものとしてよいであろう。正面三間（実長二間）に側面二間で、正面に一間の向拝、背面の中央に一間の張り出しが付く。柱はすべて角柱とする。組物は身舎も向拝も出三斗を用いる。向拝の組物を連三斗とせず出三斗としているのは、古式である。また隅以外の柱上も出三斗としているが、外側に出した斗で桁尻を受けずに拳鼻を受けている。身舎と向拝の木鼻はともに出が長く、渦巻と若葉の格好が優れている。また向拝に設けられた手挟は、波のように重なった独特な若葉の彫刻が施されている。

沼名前神社摂社渡守神社本殿

渡守神社本殿（図7）は三間社の流造で、棟札写しから貞享2年（1685）の造立であることが分かる¹⁴⁾。身舎と向拝の木鼻や向拝の虹梁形頭貫の絵様は、17世紀後期頃を示していると考えられるので、貞享2年の造立としてよいであろう。身舎柱を円柱、庇柱を角柱とする。組物は身舎を平三斗（内々陣は大斗肘木）、身舎の隅と庇を連三斗とする。身舎内部には円柱を立てて内々陣を区画し、柱間に板扉を設け、嘗てはその神座に綿見津命を祀っていた。この円柱上には大斗肘木を置く。身舎側柱には長押を廻らせ、柱頭は頭貫で繋ぎ、木鼻を付す。木鼻や実肘木の絵様は、彫りが浅く古式である。身舎の正面中央間は巴文を施した中備の蓐股を置く。また正面の柱間には、中央間は外開きの舞良戸を設け、脇間は嵌殺しの舞良戸とする。妻飾は虹梁冢扱首式とし、扱首上に出三斗を組み棟木を受ける。庇は中央2本の柱を省略して通し一間とし、庇柱を繋ぐ頭貫は虹梁形とし、その先端の木鼻は皿斗を載せ連三斗を持ち送る。中備は中央に牡丹唐獅子の透彫りをあしらった本蓐股、その両脇に蓐束を置く。蓐股と蓐束上の実肘木は、若葉をあしらったものとする。また身舎柱と庇柱は、海老虹梁で繋ぐ。

医王寺本堂

この本堂（図8）は、『桃林山畧記』によると貞享2年（1685）に、福山藩主水野勝種によって造立されたと伝えられる。その後、元禄8年（1695）と10年に彩色がされたという¹⁵⁾。向拝の虹梁形頭貫の絵様は17

世紀後期頃を示していると考えられるので、貞享2年の造立としてよいであろう。正面三間に側面三間で、正面に向拝、背面に一間通りの下屋が付く。内部を一室とする仏堂型の本堂で、規模が小さいため内陣と外陣に区画されていない。柱は、背面の下屋柱を角柱とする以外は、すべて円柱とする。内部は畳を追廻しに敷き、中央は板敷きとする。中央後ろよりに粽を付けた円柱二本を立て、その前方に唐様の須弥壇を置く。その円柱は意匠的には来迎柱であるが、さらに後方に別の円柱二本を立てて来迎壁を設けており、それら四本の円柱で壁龕を作り、厨子を安置する。その前方柱上には台輪を渡し、柱頭を下端に眉を取った頭貫で繋ぎ、木鼻を付す。組物は、若葉の浮彫りをあしらった拳鼻を付けた平三斗（背面は出三斗）を用いる。中備の本墓股は牡丹の彫刻を施し、足先は若葉とする。墓股横の小壁には、天女を描く。来迎柱状の円柱後方の円柱は天井近くまで立て登らせて、大斗を載せる。この柱と背面側柱との間の板壁には龍が描かれる。

側柱は柱頭を頭貫で繋ぎ、木鼻を付ける。組物は、平三斗（隅と来迎柱筋の内部は出三斗）として、若葉をあしらった拳鼻を付ける。中備は、正面の中央間のみ、菊文をあしらった本墓股とその両脇に蓑束を置く。そのほかの柱間は、蓑束を置く。背面の一間通りの下屋は脇仏壇とする。仏壇の間口には、腰ほどの高さに框を付け、その上部に落掛を設ける。また頭貫上には蓑束を置く。正面柱間には藪を吊り、側面の前方二間には引違の板戸を設ける。天井は格天井とし、中央やや後ろよりの須弥壇上は天井を一段高く折上げ、その部分を小組格天井とする。

向拝柱は角柱で、虹梁形の頭貫で繋ぎ、その先端の木鼻は象の丸彫りとする。中備は、中央に竹林に虎の透彫りを施した本墓股、その両脇に蓑束を置く。内側の手挟には蓮や桃などをあしらう。

医王寺仁王門

仁王門（図9）は三間一戸の八脚門で、『桃林山畧記』によると元禄5年(1692)の造立という¹⁶⁾。虹梁形飛貫の絵様は17世紀末期のものと考えられるので、その時のものとしてよいであろう。柱はすべて角柱とし、両脇間の正面と通路側の前方間は、腰部分を金剛柵として、上部を格子とする。また両脇間の背面は格子とする。脇間のほぼ中央に仁王像を安置する。中央間は正背面とも虹梁形の飛貫で繋ぎ、柱から出した肘木と斗で持送る。組物は舟肘木を用いる。脇間内部の筋違は後補である。

顕正寺山門

この山門（図10）は主柱を円柱、控柱を角柱とす

る四脚門である。建築年代を示す資料はないが虹梁形の頭貫の絵様などから、17世紀末期のものと考えられる。控柱を繋ぐ頭貫は虹梁形とし、主柱上には冠木を渡し、中備の大瓶束を載せる。大瓶束には拳鼻が付され、その上には平三斗が置かれ、その上に載せた実肘木で棟木を受けている。この大瓶束は下部に若葉の浮彫りを施し、板墓股で挟み込んでいる。一般的に大瓶束は、虹梁などに噛ませるものである。この山門の場合、太い冠木の上に大瓶束を立てたため噛ませることができなかったため、下部に結綿の代わりに若葉をあしらい、板状の笈形で挟むという斬新な手法にしたと考えられる。また正背面の中備は抽象化された蓮華の丸彫りにしており、斬新で意匠的に優れている。組物は、大斗絵様肘木を用いる。向かって左側の男梁上の本墓股は外側に牡丹文をあしらう。その内側の彫刻は花は牡丹のようであるが、葉が菊とは違っているので、ここではとりあえず薔薇としておく。仮に薔薇だとすれば、極めて珍しいものである。妻虹梁は古式に渦巻と若葉のみをあしらったものとし、その上に載せた板墓股は外側に円形の中に篆書体の頭の字を變形したもので、内側に下がり藤を浮彫りにする。

慈徳院山門

この山門（図11）は一間一戸の薬医門で、寺伝によると昭和17年頃に再建されたものという。一般的な薬医門の主柱は五平の角柱とするが、この山門は円柱としており、新たな薬医門の形式を見せている。控柱は角柱で、それを虹梁形とした頭貫で繋いでいる。この虹梁形の頭貫の絵様は木瓜渦と若葉をあしらったもので、彫りが浅いこと刻線が細いことが古式であり、17世紀末期のものと考えられる。先端を拳鼻とした男梁や女梁・絵様肘木・木鼻・墓股・大瓶束の拳鼻なども渦巻をあしらうが、頭貫と同時代のものと考えられ、これらの部材も頭貫と同じ十七世紀末期のものとしてよいであろう。また控柱や方立・扉の框は、主柱に比べると風食しており、昭和よりも古い明治頃の取替材と思われる。したがってこの門は、17世紀末期に建てられ、明治に控柱などを取り替える修理が行われ、その後昭和17年頃に主柱を取り替えたと考えられる。組物は、大斗絵様肘木とする。梁間に渡した梁には、結綿に蓮弁を彫った大瓶束を置き、その上に肘木に若葉をあしらった大斗花肘木を載せる。

南禅坊山門

この山門（図12）は一間一戸の二重門であって、上階に鐘樓を備えた鐘樓門である。建築年代を示す資料はないが、虹梁形の頭貫の絵様などから17世紀末期から18世紀初期のものと考えられる。浄土真宗寺

院では、山門と鐘楼を一体化した鐘楼門を建てることが多いが、この門はその古例である。下階は、主柱を五平の角柱として、その前後に内転びに控柱（角柱）を立てる。控柱は、虹梁形の頭貫で繋ぎ、柱から出した先端は木鼻とする。冠木は主柱に落とし込み、先端を若葉の彫刻とする男梁と女梁で挟み込む。なお、梁間方向の中央に渡した男梁の先端は、拳鼻とし渦巻と若葉を彫るが、その木口の中から細い持送りを出して化粧垂木下端を受けるといふ変則的な意匠が使われている。またその梁を受ける飼物は、正面に下がり藤、背面に若葉の浮彫りをあしらう。組物は控柱上に大斗

絵様肘木を載せ、梁間方向の男梁と桁行方向の桁を受ける。上階は、正面一間を細い間柱で三間に割り、側面は一間とする。周囲には縁を廻らせる。高欄は、当初からなかった。正背面の中央柱間には花頭窓、側面には円形の窓を開ける。上階はすべて角柱で、組物は用いない簡素な造りであるが、二軒としており、格式は高い。

Ⅲ. 建築年代について

1. 建築年代の分布

表2は、調査を実施した社寺建築の建築年代の分布



図2 阿弥陀寺本堂



図3 地藏堂



図4 阿弥陀寺鐘楼



図5 明圓寺鐘楼



図6 阿弥陀寺観音堂



図7 渡守神社本殿

写真：著者撮影（以下すべて同じ）



図 8 医王寺本堂



図 9 医王寺仁王門



図 10 顕政寺山門



図 11 慈徳院山門



図 12 南禅坊山門

表 2 建築年代の分布

	17世紀	18世紀			19世紀		明治	大正	昭和前期
		前期	中期	後期	前期	中期			
本殿・幣殿・拝殿	1					1	3	2	
他の神社建築			1				3		2
小祠							3	2	8
本堂	2	1	4		1	2	2	1	3
山門・鐘楼・経堂・庫裏	6	2	3	1	3		3	2	4
小堂・辻堂	2	1			1	1	4	2	6
合計	11	4	8	1	5	4	18	9	23

を示したものである。対象とした 83 棟の建築年代の内訳は、江戸時代が 33 棟、明治時代が 18 棟、大正時代が 9 棟、昭和前期が 23 棟であった。中世の建造物は、すでに知られている安国寺釈迦堂のほかにはなく、すべて江戸時代以降に造立されたものであった。また明治時代以降に造立されたものは、ほとんどが再建されたものであった。

神社建築は 26 棟あり、江戸時代のものは 3 棟しかない。それに対して寺院建築は 57 棟の内、30 棟が江戸時代に造立されたものであった。神社建築の大半が明治時代以降の造立であるのは、半数に当たる 13 棟

が小祠¹⁷⁾であるためと解される。

なお調査対象外の沼名前神社能舞台、福禅寺本堂・対潮楼を含めると、鞆の浦において江戸時代に造立された社寺建築は 36 棟になる。現在、鞆の浦に残る昭和前期以前の社寺建築の約 40% が江戸時代に造立されたもので、全体的に保存状態は良いと考えられる。また明治時代から昭和前期にかけて 50 棟もの社寺建築が造立されているが、これは鞆の浦の民衆の経済力と信仰心の厚さを示していると考えられる。

2. 17 世紀の建造物

ところで、昭和 55 年度に行われた、広島県の近世

社寺建築緊急調査の報告書である『広島県の近世社寺建築』¹⁸⁾によると、広島県内で17世紀に造立された社寺建築は、202棟である。これは1次調査の対象となった1630棟の僅か12%にすぎない¹⁹⁾。このことから、広島県内において17世紀に造立された社寺建築は、数が少ないといえる。その原因としては、すでに先行研究²⁰⁾で指摘されているように、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの後、毛利氏が周防・長門に転封になった際、社寺の維持管理が在地領主層(毛利氏とその有力家臣)から地元民衆の手に移ったためと考えられる。17世紀の民衆はそれほど裕福ではなかったため、社寺の維持管理を行う金銭的な余裕がなかった。18世紀に入ると漸く社寺に手を回せる余裕を民衆が持ったらしく、18世紀中期頃から造立が増えていく傾向にあると考えられている。

それに対して鞆の浦では、江戸時代の社寺建築遺構36棟(以後の考察においては、未調査の沼名前神社能舞台、福禅寺本堂・対潮楼を含む)の内、14棟が17世紀に造立されたものである。鞆の浦という狭隘な場所で、県内では社寺建築遺構が少ない時期とされる17世紀の建造物が14棟も残っていることは、鞆の浦の社寺建築の大きな特色とすることができる。

その要因としては、鞆の浦の地元民衆、すなわち商人の高い経済力が考えられる。元禄13年(1700)の『備後国沼隈郡鞆町屋敷御検地水帳』²¹⁾によると、大坂屋や柳屋などのように上屋敷・中屋敷・下屋敷と複数の屋敷を所有していた商人がいたことが分かる。この検地帳は元禄13年のものであるが、こういった商人はそれ以前、すなわち17世紀から高い経済力を持っていたとしてよいであろう。

このほかに17世紀における鞆の浦の商人の経済力を示す事例としては、鞆の津塔が挙げられる²²⁾。鞆の津塔は、五輪塔と宝篋印塔を混在させた独特な形状の石塔である。現在確認されているのは、安国寺に1基、静観寺に2基、阿弥陀寺に12基の計15基である²³⁾。鞆の津塔は刻銘や石の風食状況から、いずれも17世紀中期頃までに鞆の浦の商人やその家族の墓として造立されたと考えられる。その規模は、小さなものでも6尺を越え、大名家が造立する墓石塔の規模に匹敵するものである。そのような大規模の石塔を造立することができたことからして、鞆の浦の商人の経済力は高水準にあったと考えられる。

先述したように阿弥陀寺の鐘楼と観音堂は、それぞれ奈良屋、大坂屋という商人の手によって造立されたものである。また福禅寺本堂は水野氏によって造立されたものであるが、棟札²⁴⁾によると堺屋や柳屋とい

た商人が檀家としてそれを援助していたことが知られる。さらに医王寺は水野氏によって本堂が建てられているが、柱の彩色は姫路屋によるものであるし、『桃林山畧記』には、厨子や鳥居や仏具・仏像などが商人によって造立・寄進されたという記述が見られる。また渡守神社本殿は、記録によると水野氏の家臣によって造立されたというが、福禅寺本堂のように商人がこれを援助していた可能性が考えられるし、記録のないほかの17世紀造立の建造物についても、福禅寺と同様に商人の経済力を背景として造立された可能性を否定することはできない。

鞆の浦は日本有数の港町であり、海運で巨大な富を得た商人の力によって、県内に類を見ないほど、17世紀という江戸時代の早い時期に多くの社寺建築の造立が可能となったと考えられる。

鞆の浦において17世紀に造立された社寺建築は、前述の阿弥陀寺本堂を除いて、いずれも保存状態が良く、広島県における17世紀の建築の代表例とすることができる。また、18世紀以降の建築も保存状態が良いものが多数を占めており、鞆の浦の建築文化の高さを窺うことができる。

IV. 細部意匠

1. 独特な台輪

社寺建築の細部意匠は、組物や虹梁・木鼻の絵様・蓑股の彫刻など、その建物を飾る要素である。それは建築年代や地域によって左右されるものである。一般的には、時代が降るほど複雑になり、装飾性が高くなっていく傾向にある。鞆の浦の社寺建築もその例外ではなく、17世紀は単純なものが多数を占め、18世紀になると複雑なものが増えていく。

ここでは、鞆の浦における社寺建築の細部意匠の内、独特な台輪について述べておく。台輪は柱上に渡した厚い板で、一般的にその先端は線形を施す(図13)。鞆の浦の社寺建築では、先端の線形の側面に入り込みがある独特な形の台輪が見られた。次にその実例を挙げておく(図14)。

福禅寺本堂側柱上および来迎柱上(元禄7年[1694])・明圓寺本堂来迎柱上(18世紀前期)・医王寺太子殿(18世紀前期)・妙蓮寺本堂広縁柱上および来迎柱上(宝暦12年[1762])・善行寺本堂来迎柱上(18世紀中期)・法宣寺本堂来迎柱上(18世紀中期)・善行寺山門(18世紀中期)・南禅坊本堂広縁柱上(万延元年[1860])・善通寺堂(19世紀中期)・小烏神社本殿、幣殿(明治32年[1899])・安国寺金倉寺堂(昭和前期)

鞆の浦での初例は元禄7年の福禅寺本堂で、最も新



図 13 一般的な台輪 (医王寺本堂)

しいのは昭和前期の安国寺金倉寺堂である。またこの独特な台輪は、18世紀中期までの事例が大半を占めている。

この台輪は、全国的に見ても類例が少ない²⁵⁾。広島県内においては、管見によれば明王院本堂（元応3年〔1321〕、福山市草戸町²⁶⁾）と観音寺本堂（慶安4年〔1651〕、福山市北吉津町²⁷⁾）にしかない。ところで、明王院本堂は外陣に輪垂木天井を用いている。輪垂木天井は、江戸時代になり崇福寺大雄宝殿（正保3年〔1646〕、長崎県）など黄檗宗寺院で僅かに用いられたものであり、明王院本堂の輪垂木天井は中世においては唯一の事例である（三浦1995年）。観音寺本堂は黄檗宗ではなく真言宗であるが、外陣に輪垂木天井を用いている。その観音寺本堂に輪垂木天井が用いられているのは、同一市内に所在する古刹であり、同じ真言宗の寺院である明王院本堂を模倣したためと考えられる。そして、同様に台輪も明王院本堂を模倣したと考えてよいであろう。

観音寺本堂は、棟札²⁸⁾によると小川又エ衛門孟親を大工棟梁として造立されている。鞆の浦において、最初に繰形の内側に入れ込みがある独特な台輪が用いられたのは、福禅寺本堂である。棟札²⁹⁾によると福禅寺本堂を造立した大工棟梁は、小川佐野右衛門政成であり、小川又エ衛門孟親と同姓であることが注目される。小川佐野右衛門政成は「福山住」であり、福山八幡宮社殿（天和3年〔1683〕、福山市北吉津町）の造立にも携わった人物である。福禅寺本堂と福山八幡宮は、いずれも水野氏によって造立されており、小川佐野右衛門政成は、水野氏と関係がある工匠と考えられる。小川又エ衛門孟親については、詳らかでないが、観音寺は水野氏によって現在地に移された³⁰⁾もので、水野氏とは関わりが深い。その本堂を再建した工匠であることからして、水野氏と無関係とは考えられない。したがって両者は水野氏傘下の工匠と推測され、さら

に同姓であることから、同一の工匠集団に属していた可能性が高いと考えられる。そうすると福禅寺本堂と観音寺本堂は、同一の工匠集団によって造立されたとすることができる。

以上から、小川佐野右衛門政成は福禅寺本堂を造立する際に、同一の工匠集団が造立したと考えられる観音寺本堂において用いられていた先端の繰形に入れ込みのある独特な台輪を再度用いたとして大過ないものと思われる。したがって、鞆の浦における独特な台輪は、観音寺本堂の手本となった明王院本堂を模倣したとしてよいであろう。以後、鞆の浦では、元禄7年から18世紀中期までの約50～70年間に頻繁に用いられているが、これは福禅寺本堂の造立に関わった地元の工匠やその一門によって用いられたためと推測される。

2. その他の細部意匠

前述した台輪のほかに鞆の浦の社寺建築において特徴的な彫刻の事例を挙げておく（図15）。まず医王寺本堂は、側柱上の平三斗の拳鼻に若葉の浮彫りをあしらう。若葉の拳鼻は、室町時代に流行したのものがあるが、鞆の浦では江戸時代の社寺建築で多用された彫刻の題材である。同様に若葉をあしらった拳鼻の例としては、沼名前神社随神門の大斗絵様肘木に付した拳鼻がある。南禅坊山門は男梁の先端に若葉を彫っている。また顕政寺山門は、冠木の上に大瓶束を置き、それを板状の笄形で挟むという変則的な手法を見せ、大瓶束の下部は結綿の代わりに若葉をあしらっている。阿弥陀寺山門は、控柱通りの中備の蓑股をその上の実肘木とともに若葉状の浮彫りをあしらったものにしており、秀逸といえる。実肘木に若葉の彫刻をあしらったものには、渡守神社本殿の庇の本蓑股・葺束上の実肘木や地藏院山門（18世紀中期）の中備の蓑股上の実肘木がある。法宣寺本堂（18世紀中期）の向拝木鼻は、若葉を丸彫りとしたもので、珍しい意匠である。

鞆の浦の社寺建築で、若葉とともに彫刻に多用されたのが波文である。妙蓮寺本堂の外陣の虹梁形飛貫は、渦巻と若葉の代わりに波文をあしらっている。同様の例は、阿弥陀寺山門や善行寺本堂や法宣寺本堂などがある。また小松寺山門（18世紀後期）の木鼻は、波文を彫ったものである。波文は、港町鞆の浦に相応しい彫刻の題材と考えられる。

以上のように鞆の浦の社寺建築の細部意匠は、秀逸なものが多い。これは京都や大坂から直接に最新技術が導入できる港町という鞆の浦の地理的環境によると考えられる。なお、京都や大坂の社寺建築の細部意匠との比較は稿を改めて述べることにしたい。



1 明王院本堂



2 観音寺本堂



3 福禅寺本堂



4 明圓寺本堂



5 医王寺太子殿



6 妙蓮寺本堂



7 善行寺本堂



8 南禅坊本堂

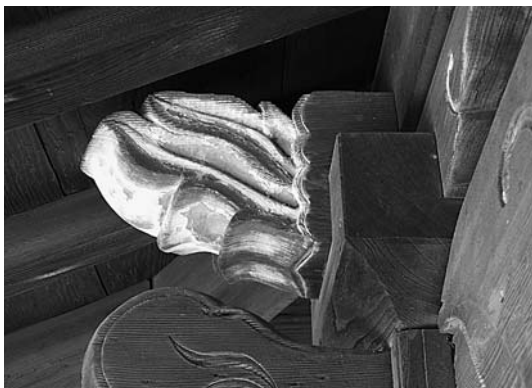
図 14 独特な台輪



1 医王寺本堂拳鼻



2 沼名前神社随神門拳鼻



3 南禅坊山門男梁



4 顕政寺山門大瓶束



5 阿弥陀寺山門墓股



6 法宣寺本堂木鼻



7 阿弥陀寺山門虹梁



8 小松寺山門木鼻

図 15 若葉と波文の彫刻

V. 結 語

鞆の浦において、江戸時代に造立された社寺建築は36棟あり、その内14棟が17世紀に造立されたものと考えられる。広島県内では、毛利氏が転封となったのを契機に社寺の維持管理が地元民衆に移り、その経済力は貧弱であったため、17世紀の建築遺構は乏しい。それに対して鞆の浦では、県内に類を見ないほど17世紀に造立された建造物が多い。これは檀家である商人の経済力を背景としていたと考えられる。

また全国的にも類例が少ない、先端の線形に入れ込みのある台輪は、明王院本堂を模倣したと考えられ、同一市内における細部意匠の伝播の様相を伺うことができた。さらに若葉や波文の彫刻などは県内の他地域と比べると先進的かつ優れたものが少なくない。これは鞆の浦が有数な港町であったため、京都や大坂から最新建築技術が直接入ってくる地理的環境によるものと考えられる。

以上から鞆の浦の社寺建築は、町並みや港湾施設と同様に港町としての特色を示しているものといえる。

なお、本調査に際して、各社寺の関係者の皆様には大変お世話になり、山口佳巳氏（日本学術振興会特別研究員）には、実測や年代判定などに助力を得ました。ここに記して感謝いたします。

【註】

- 1) 鞆の浦の町並みや石造物に関する論考は幾つかあるが、近年のものに川後のぞみ（2009）：鞆の浦の町家における接客空間とその意識。中国四国歴史学地理学協会年報，5，20-31.，同（2009）：鞆の浦の町家における建築活動の諸相。内海文化研究紀要，37，37-56.，同（2010）：鞆の浦の町家における土間形式の変化。芸備地方史研究，268・269，104-123.，山田岳晴（2009）：福山市鞆の浦における伝統的石造港湾施設の調査研究。民俗建築，135，20-27.，同（2010）：福山市鞆の浦の町並みにおける神社の伝統的石造物の調査研究。民俗建築，137，22-30がある。また建造物（町並み）と石造物の調査報告書としては、広島大学大学院文学研究科文化財学研究室編（2009）：『鞆の浦の建築 福山市鞆町の伝統的町並に関する調査研究報告Ⅱ』福山市教育委員会。がある。
- 2) 沼名前神社蔵
- 3) 平成22年度に福山市教育委員会が広島大学大学院文学研究科三浦正幸研究室に委託した伝統的町並み調査の一環である。
- 4) 福山市史編纂会編（1963）：『福山市史 上巻』福山市史編纂会。
- 5) 重要文化財沼名前神社修理委員会編（1959）：『重要文化財 沼名前神社能舞台修理工事報告書』重要文化財沼名前神社修理委員会。
- 6) 文化財建造物保存技術協会編（2002）：『史跡 朝鮮通信使遺跡鞆福禪寺境内 福禪寺本堂保存修理工事報告書』福禪寺本堂保存修理委員会。
- 7) 文化財建造物保存技術協会編（1992）：『広島県史跡 鞆朝鮮信使宿館跡（鞆対潮楼）保存修理工事報告書』鞆朝鮮信使宿館跡（鞆対潮楼）保存修理委員会。
- 8) 『あくた川のまき』（備後郷土史会編（1930）：『備後叢書第4巻』歴史図書社。所収）
心光山阿彌台寺条
延宝年中の住持，本譽，勇鋭の志をはけまし，四方をすゝめ再創せり，今の仏堂是なりし
- 9) 虹梁の絵様や実肘木の形状は，豊臣秀吉とその子秀頼によって主に近畿地方で建てられた社寺建築の細部意匠に類するもので，豊臣恩顧の大名である福島正則が関係した可能性も考えられる。
- 10) 『あくた川のまき』安国寺条
寺前に地藏堂あり，（中略）慶安年の奉行，酒井七郎衛門の時，過銭とやらんいふものありしをえて堂をたて，石像を安坐し奉る
- 11) 『あくた川のまき』心光山阿彌台寺条
鐘撞堂あり，慶安年中に有磯町奈良屋か造となり
- 12) 『あくた川のまき』明圓寺条
寺内に鐘撞堂あり，承応年中に住侶長賢建にけらしも
- 13) 『あくた川のまき』心光山阿彌台寺条
寺内に観音堂あり，延宝年中に閑町の太坂屋か建けり
- 14) 註（4）所収
- 15) 『桃林山畧記』（医王寺蔵）貞享二年条
本堂再建，今年七月大檀那当城主水野美作守勝種公材木繕詰寄附之勸化疏於檀家縦三間横四間成之当津奉行 左衛門
『桃林山畧記』元禄八年条
本堂彩色，今年春到冬莊飾成施主現住宥意
『桃林山畧記』元禄十年条
柱彩飾，今年六月八日本堂柱八本彩色主道越町姫路屋長兵衛
- 16) 『桃林山畧記』元禄五年条
仁王門，今年十一月右一宇建立主現住宥意平村檀家加歩 許音四人
- 17) 鞆の浦の小祠は，いずれも一間社流見世棚造と小規模なものであるため，耐用年月が短い。
- 18) 広島県教育委員会編（1982）：『広島県の近世社寺建築』広島県文化財協会。
- 19) 1次調査は県内の社寺建築の内，近世以前のものを対象としている。しかし，近世以前の建造物がすべてが対象とはなっておらず，未調査なものも少なくない。未調査の社寺建築の中には17世紀に造立された建物があると考えられるが，202棟から急激に増加するとは考えがたい。また

202棟の内、2次調査が行われ建築年代が確定しているのは、91棟しかない。1次調査の建築年代は主に文字資料によるものであり、現地調査を行わなければその年代は確定できない。したがって、残りの111棟のすべてが17世紀に造立されたものとは考えられない。

- 20) 三浦正幸(1995): 広島県の社寺建築. 広島県文化財ニュース, 144, 1-5.
- 21) 広島大学図書館蔵。なお、本文の閲覧は、広島大学デジタルミュージアムのデータベースを利用した。
- 22) 鞆の津塔については紙幅の都合上、別稿で改めて考察したい。
- 23) 阿弥陀寺には、鞆の津塔の部材と思われる石が残っており、往時は現在残っているより多くの鞆の津塔が存していた可能性が高い。
- 24) 註(6)所収
- 25) 管見によると国宝・重要文化財に指定されているものでは、法用寺本堂内厨子(正和3年[1314], 福島県), 魚沼神社阿弥陀堂(永禄6年[1563], 新潟県), 大泉寺観音堂(文禄2年[1593], 新潟県), 酬恩庵本堂(江戸前期, 京都府)がある。また若干形が異なるが愛媛県に所在する医王寺(吉田町)本堂内厨子(応永22年[1415]), 善行寺薬師堂(文明15年[1483]), 正法寺観音堂内厨子(15世紀末~16世紀初)のように付け根部分に入れ込みを取ったものがある。
- 26) 国宝明王院本堂修理委員会編(1964):『国宝 明王院本堂修理工事報告書』国宝明王院本堂修理委員会。
- 27) ハセベ建築事務所編(2005):『広島県重要文化財 観音寺本堂・表門保存修理工事報告書』観音寺。
- 28) 註(27)所収
- 29) 註(6)所収
- 30) 『水野記』(広島県編(1973)『広島県史 近世資料編I』広島県, 所収)
長尾山千手院観音寺, 今有^二城北山^一, 本尊千手観音也, 寛永ノ比水野勝成移^三此地^三

【文献】

- 国宝明王院本堂修理委員会編(1964):『国宝 明王院本堂修理工事報告書』国宝明王院本堂修理委員会。
- 重要文化財沼名前神社修理委員会編(1959):『重要文化財 沼名前神社能舞台修理工事報告書』重要文化財沼名前神社修理委員会。
- 川后のぞみ(2009): 鞆の浦の町家における接客空間とその意識. 中国四国歴史学地理学協会年報, 5, 20-31.
- 川后のぞみ(2009): 鞆の浦の町家における建築活動の諸相. 内海文化研究紀要, 37, 37-56.
- 川后のぞみ(2010): 鞆の浦の町家における土間形式の変化. 芸備地方史研究, 268・269, 104-123.
- ハセベ建築事務所編(2005):『広島県重要文化財 観音寺本堂・表門保存修理工事報告書』観音寺。
- 広島県編(1973):『広島県史 近世資料編I』広島県。
- 広島県教育委員会編(1982):『広島県の近世社寺建築』広島県文化財協会。
- 広島大学大学院文学研究科文化財学研究室編(2009):『鞆の浦の建築 福山市鞆町の伝統的町並に関する調査研究報告II』福山市教育委員会。
- 備後郷土史会編(1930):『備後叢書 第4巻』歴史図書社。
- 福山市史編纂会編(1963):『福山市史 上巻』福山市史編纂会。
- 文化財建造物保存技術協会編(1992):『広島県史跡 鞆朝鮮信使宿館跡(鞆対潮楼)保存修理工事報告書』鞆朝鮮信使宿館跡(鞆対潮楼)保存修理委員会。
- 文化財建造物保存技術協会編(2002):『史跡 朝鮮通信使遺跡鞆福禅寺境内 福禅寺本堂保存修理工事報告書』福禅寺本堂保存修理委員会。
- 三浦正幸(1995): 広島県の社寺建築. 広島県文化財ニュース, 144, 1-5.
- 山田岳晴(2009): 福山市鞆の浦における伝統的石造港湾施設の調査研究. 民俗建築, 135, 20-27.
- 山田岳晴(2010): 福山市鞆の浦の町並みにおける神社の伝統的石造物の調査研究. 民俗建築, 137, 22-30.

(2011年8月31日受付)

(2011年11月18日受理)